

2周ないし2周しているもので、眼の黒い発眼卵であり、孵化直前の群と考えられた(写真-6)。いずれの卵も、反転した外卵膜により、貝殻片や砂利等にしっかりと付着していた。

6月6日には、8,000粒に及ぶ卵が採集されたが、採集卵の分布状況から見て、産卵場の広がり、100m四方前後のごく狭い範囲と目された。



写真-5 胚体が3/4周～1周

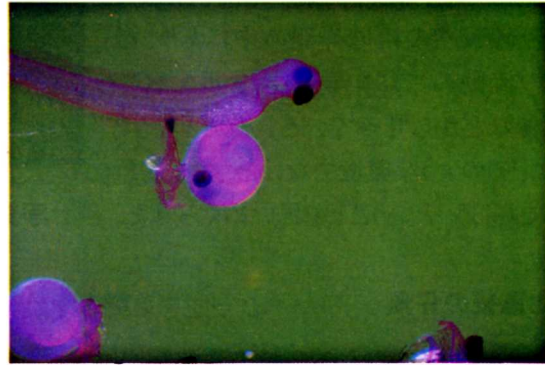


写真-6 胚体が1周と1/2周ないし2周

表-1 小良ヶ浜前産卵場における採集卵の発生状況(1987年)

調査月日	5月21日	6月6日	* (左の1地点)	6月16日	6月24日
調査地点数 (箇所)	3	12	(1)	3	7
卵採集地点数 (箇所)	1	10	(1)	3	5
採集した卵数の合計 (粒)	39	約8,000	(約6,000)	113	37
発生状況調査供試個体数 (粒)	37	265	(51)	109	37
<b>(卵発生状況)</b>					
胚体がまだ形成されていない(粒)	11	81	(45)	10	8
胚体が3/4周～ほぼ1周 (粒)	26	63	(1)	39	3
胚体が1周と1/4周～2周 (粒)	—	121	(5)	60	26
(眼の黒い発眼卵)					

また、注目すべきは、6月6日の調査で、1地点から6,000粒以上の卵が採集されたが、この卵の大部分(約9割)は、胚盤が形成されてはいるが、胚体はまだ形成されていない受精卵で、産卵後間もないものであったことにより、6月に入ってもまだ、産卵盛期にあったことと推察された。

なお、同年7月6日、人工授精を試みるために、同産卵場において、刺し網(2張り、刺し網の敷設時間は約2時間)により、産卵親魚を採捕した。採捕した親魚は、合計119尾(雄62尾、雌57尾)を採捕したが、雄の尻鰭鱗の吸着性により、網目や手に粘り着き、7月になってもまだ、産卵が行われていたことを物語っていた。小雪舞う、寒い時期から始まった産卵場調査も、7月6日は、暑い夏の日射しが照りつけ、吹き出る汗を拭いながら、親魚を網目からははずした記憶が、まだ脳裏に焼き付いている。

### 人工授精の試み

7月6日に持ち帰った親魚から、搾出法により、人工授精を試みた(7月6日の15時、シャーレ上で人工授精、水温17.8℃)。